「めぐり愛て」

水瀬真理佳

登場人物表

高槻真琴（２７）産婦人科医
成瀬樹吏（２７）写真家
橘めぐみ（２７）真琴の親友
大津啓太（２６）成瀬の親友
高槻香菜子（５２）真琴の母親
高槻慎也（５３）真琴の父親
成瀬智美（５８）成瀬の母親
成瀬晃（６２）成瀬の父親
細谷侑里（３３）成瀬の姉
細谷奏多（０）侑里の息子
大島賢一（５２）産婦人科の部長
西原飛鳥（２９）真琴の同僚医師
水野勇哉（２７）真琴と同期の医師
藤井正彦（５０）成瀬の主治医
町田海斗（２５）研修医
工藤悦子（４５）助産師
宍戸瑠菜（３０）看護師
渡部克己（６７）入院患者

久保美由紀（３５）入院中の妊婦
有馬園子（２７）真琴たちの同級生
森山花音（２７）真琴たちの同級生
幹事
医師Ａ
看護師Ａ
看護師長
老医
事務員
男子高校生

あらすじ

小学校の頃からの夢を叶えて産婦人科医になった高槻真琴（２７）は、海外で活動するという目標に向けて大学病院で日々奮闘している。プライベートも充実させたいと思ってはいるが、不規則勤務で忙しい上に人見知りな性格のため、新しい出会いには消極的だった。出雲大社のお守りを持ち歩いているが、その効果は全くない。

そんな時、親友の橘めぐみ（２７）から誘われた小学校の同窓会で、同級生の成瀬樹吏（２７）と再会する。当時からカッコよく男女から人気のあった成瀬の周りには相変わらず人がたくさん集まる。しかし成瀬は、なぜかその輪を抜け出して真琴の席にやってきて、しきりに真琴に話しかける。初めは戸惑っていた真琴だが、思い出話やお互いの共通点の話で盛り上がり、仕事が落ち着いたら食事に行く約束をする。

やがて二人は付き合い始めるが、多忙な医

師と世界を駆ける写真家ではデートも満足にできない。少しでも一緒にいられる時間を増やすため、同棲を始める。お互いの家族からも祝福され、このまま幸せな日々が続くはずだった。

ところが、成瀬が食欲不振や眩暈の症状を感じるようになり、心配する真琴。真琴を安心させるため病院を受診した成瀬は、末期のすい臓がんで余命半年と宣告される。もちろん真琴は成瀬を支える覚悟だったが、自分の存在が真琴の将来を奪うことになると思った成瀬は黙って真琴の前から姿を消す。

成瀬から口止めされていた成瀬の親友・大津啓太（２６）は、辛そうな真琴を見て黙っていられず、成瀬が真琴の大学病院に入院していることを伝える。

真琴はすぐに成瀬の元へ会いに行く。そして本音で話し合った二人は、一緒にいることを決意。成瀬は真琴にプロポーズをする。

治療の効果があり退院できた成瀬は、真琴

と一緒に出雲大社にお礼参りに行くことにする。しかし出発の日、駅で倒れた成瀬は救急搬送され、医師からはもう長くないと言われる。真琴は病室で成瀬からのビデオレターを見ながら涙する。

３年後、海外へ飛び立つ前に渋谷を訪れた真琴。そこには真琴の写真を使ったＮＧＯ団体の巨大看板があり、写真の右下には成瀬のサインが入っていた。

○大学病院・産婦人科・カンファレンス室

暗い室内、プロジェクターでスクリーンにスライドが投影されている。

白衣を着た医師たちがスクリーンを見つめる。

真琴「今日紹介入院になりました。４２歳、妊娠２５週の切迫早産妊婦です。最新初見は本日頸管長２５ｍｍ、胎児の状態は良好。前医ではリトドリン内服で様子を見ていました」

と、高槻真琴（２７）が説明。

部長・大島賢一（５２）が手を挙げて、

大島「今後リトドリンはどうする？」

真琴「過去にも早産歴があり、今日の所見を見ても、点滴に切り替えることが望ましいと考えます」

大島「いい判断だ。じゃあ次」

○同・ナースステーション

真琴、助産師・工藤悦子（４５）に声

をかける。
真琴「あ、工藤さん！」
悦子「はい、先生」
真琴「４１１の岸さん、リトドリン点滴のオーダー入れたので、夜勤の人に申し送りお願いします」
悦子「分かりました」
看護師Ａ「先生。４０７の久保さんお願いします」
真琴「はい行きまーす」

○同・処置室
処置台で仰向けの妊婦・久保美由紀（３５）の腹部に真琴がエコーを当てて胎内を確認。
真琴「うん。赤ちゃん元気ですよ」
美由紀「本当ですか？　良かったぁ」
真琴「ただお母さんの血圧がやっぱりちょっと心配なので、点滴はまだ外せないかな」
美由紀「そっかぁ。でも赤ちゃん元気なら我

慢します！」
真琴「気になることがあったらすぐ助産師さんに相談してくださいね」

○同・休憩室（夜）
真琴、ソファに座ってコーヒーを飲む。
同僚・西原飛鳥（２９）が入って来る。
飛鳥「お疲れ～」
真琴「お疲れ！」
飛鳥「まだ帰んないの？」
真琴、時計を確認して、
真琴「（慌てて）やばい！」
飛鳥「明日休みでしょ？　ゆっくり寝なよー」
真琴「うんありがと！　お先に！」
と、部屋を出て行く。

○バル・店内（夜）
真琴とめぐみ「カンパーイ！」
真琴と親友・橘めぐみ（２７）、ビールを飲む。

真琴「ぷはぁーー生き返るぅ。めぐみと飲むのをモチベに先月から頑張ってたの！」
めぐみ「それは嬉しいけど、他に楽しみがないのは親友として心配なんだけど。仕事はどう？　研修医は終わったんだよね？」
真琴「うん終わった。今は専門の領域を極めてるとこ」
めぐみ「すごいな～昔からの夢叶えて本当にお医者さんになったんだもん。立派！」
真琴「ようやく一歩進めたって感じだけどね」
めぐみ「国境を越えて世界中どこへでも助けに行くのが、真琴の目標だもんね」
真琴「（頷いて）めぐみは最近どう？」
めぐみ「仕事はボチボチ、相変わらずかな」
と、頬が緩んでいる。
真琴「（ニヤニヤしながら）え、なになに。なんかいいことあったでしょ？」
めぐみ「（嬉しそうに）実はね……彼氏できた！」
真琴「うっそ！　いつ？　誰？　会社の人？」

めぐみ「ううん、アプリ。これで最後にしようと思って会った人が超タイプで。それがなんか順調に進んで、付き合う流れに」
真琴「良かったじゃん！　おめでとう！」
めぐみ「やっぱり出雲大社行ったからだと思う！　ちゃんと効果あったよ！」
真琴「えー！　私だって毎日持ち歩いてるのになんにもないよ？」
と、縁結守を出す。
めぐみ「ただ持ち歩くだけじゃダメに決まってるじゃん！　神様が空から男落としてくれるわけじゃないんだから！」
真琴「そうだけどさぁ……」
めぐみ「そんな人見知りの真琴にはこれ」
と、スマホのメッセージ画面を見せる。
【6―2クラス同窓会】の文字。
真琴「あー私はやめ……」
めぐみ「ダーメ！　同窓会は別に初対面じゃないんだから問題ないでしょ！」
真琴「私は久しぶりに会うっていうのも苦手

なんだって……めぐみも知ってるでしょ？
誰も私のことなんて覚えてないだろうし、
行ってもしょうがないよ」
めぐみ「でも行ったら何かいい出会いがある
かもよ？　大丈夫、私も行くから」
真琴、物申したげな表情だが、めぐみ
の圧に押し負ける。

○都心・大通り（夜）
成瀬樹吏（２７）、キャリーケースを引
きながら歩道を歩く。着信に気づき、
成瀬「もしもし」
大津の声「もしもしー？　オレオレ」
と、親友・大津啓太（２６）からの電
話。
成瀬「（笑いながら）その詐欺みたいな電話の
掛け方いい加減やめろって」
大津の声「ハハッ。今電話いい？」
成瀬「うん。外歩いてるから平気」
大津の声「お前また歩いてんの？　ほんと散

歩好きだな。犬かよ」
成瀬「いいだろ別に。それで、どうした？　急に電話なんて」
大津の声「今度小学校の同窓会あるから。樹吏もこいよ」
成瀬「いつ？」
大津の声「来月7日だったかな。土曜」
成瀬「行きたいけど、その日海外から戻りだからちょっと厳しいかも」
大津の声「お前来ないとみんながっかりするよ。女子なんてどうせみんなお前目当てなんだから」
成瀬「（笑いながら）大袈裟だな」
大津の声「とにかく！　遅れてもいいから絶対参加！」
成瀬「今のところ誰がくんの？」
大津の声「男子はわりと多かったな。女子は相沢さんとか後藤さんとか来るって」
成瀬「……高槻さんって来んのかな？」
大津の声「高槻さん？　ごめん誰だっけ」

成瀬「3年からずっと俺らと同じクラスだったじゃん！　頭良くて、保健委員で、中学受験した！」
と、熱くなる。
通行人が成瀬をチラチラ見る。
大津の声「あぁ～……？　樹吏話したことあったん？」
成瀬「あんまないけど……」
大津の声「……いるよ高槻さん。参加になってる！」
成瀬「……そっか」
と、何やら嬉しそうな顔。
大津の声「お前もしかしてそういうこと？」
成瀬「（わざとらしく）あれ、なんか聞こえない。電波悪いかも！　もう切るな！」
大津の声「あ、おい樹吏！」
成瀬、大津の話の途中で電話を切り、ガッツポーズをする。

○渋谷・井の頭通り

工事現場の白い仮囲いに、風景写真が印刷されている。

真琴「綺麗……」

右下の方にJ.Naruseのサイン。

真琴「ジェー・ナルセ……成瀬……ジェー……？　樹吏くん……いや、まさかね」

真琴、仮囲いの全景をスマホのカメラで撮影して再び歩き出す。

○居酒屋・店の前（夜）

真琴、店の前でめぐみと電話。

真琴「えぇっ！？　来れなくなった！？」

めぐみの声「ほんとごめん！　幹事には連絡してるから」

真琴「じゃあ私もやめる」

めぐみの声「ダメだよ。もう店着いたでしょ？」

真琴、気まずそうに店の看板を見上げる。

真琴「お金はちゃんと払う」

めぐみの声「用意した食材は？　フードロスは世界の深刻な課題なんだから！　ＳＤＧｓ大事！」
真琴「親友の今より地球の未来デスカ」
めぐみの声「行ったら絶対楽しいから！　そういうもんだから！　ね？」
真琴「……（嫌そうに）分かった。仕事頑張ってね。はぁい、またね」
真琴、電話を切ってため息をつく。

○同・座敷（夜）
真琴、目立たないように下を向きながら奥のテーブルへ行く。
真琴「……ここ、座ってもいい？」
同級生・有馬園子（２７）と森山花音（２７）
に声をかける。
園子「真琴ちゃんだよね？」
真琴、目をパチパチさせて、
真琴「覚えてくれてたんだ……」

園子「もちろん覚えてるよ！　真琴ちゃん学年で一番頭良くて有名だったもん。ね？」
花音「うん。教えるのすごい上手だったから、みんな先生より真琴ちゃんに聞いてた！」
真琴「（照れながら）そうだっけ？」
入口付近で盛り上がる声がする。
大津「みんなー！　お待ちかねの成瀬樹吏が到着したぞ～！」
成瀬が扉から入って来て歓声が上がる。
真琴が扉の方を見ると成瀬と目が合う。
成瀬「！」
しかしすぐに成瀬の周りに男女が集まり、姿が見えなくなる。
花音「成瀬くん相変わらずかっこいいね」
園子「昔から人気だったもん」
真琴「そうだね」
と、愛想笑いで相槌をうつ。
×　×　×
成瀬「ここ座ってもいい？」
成瀬がいつの間にかやって来る。

真琴「えっと……」
と、園子と花音の方を見る。
園子と花音「もちろんいいよ！」
成瀬「サンキュー」
成瀬、真琴の隣に座る。
成瀬「みんな久しぶり」
園子と花音「（嬉しそうに）久しぶり」
成瀬「高槻さんも久しぶり。もしかして小学校の卒業式ぶり？」
真琴「……そ、そうかも」
成瀬「地元でも全然会わなかったよね」
真琴「……そうだね」
成瀬「ていうか、俺のこと覚えてる？」
真琴「……もちろん！　成瀬くん……」
成瀬「良かったぁ。忘れられてなかった」
真琴「……忘れないよ。成瀬くんは昔から人気者だったもん」
大津「あーいた！」
と、大津がやってくる。
成瀬「啓太！」

大津「ほら、忘れもん」
と、成瀬にビールジョッキを渡す。
成瀬「サンキュー」
大津「あれ、もしかして高槻さん？」
大津、真琴と成瀬の間に座ろうとする。
成瀬「ちょ、こっち座れって！」
と、大津を真琴から遠ざける。
大津「コイツ、高槻さんが同窓会来るなら行くって言って来たんだよ」
成瀬、大津の言葉をかき消すように、
成瀬「（恥ずかしそうに）あれー啓太、飲み足りないだろ。これ飲んでいいから！」
と、自分の酒を無理やり飲ませる。
成瀬「今の気にしないで」
真琴「う、うん……？」
と、訳がわからずとりあえず微笑む。
幹事「二次会行ける人、駅前のカラオケ集合な！」
と、全体に声をかける。
成瀬「高槻さん行く？　二次会」

真琴「私はここで帰ろうかな」
成瀬「そっか……」
大津「お前は強制参加な！」
と、成瀬と肩を組んでじゃれ合う。
真琴、２人を微笑ましく見る。

○同・店の前（夜）
真琴「私ここで帰るね」
園子「え～残念！」
花音「またね」
真琴「ありがとう！　バイバイ！」
真琴、集団とは反対方向に歩いて行く。
成瀬、集団の先頭から真琴の後ろ姿を見る。
成瀬「あれ、駅ってこっちじゃ……？」
大津「ほら、樹吏も行くぞ」
成瀬、真琴を気にしながら、
成瀬「あぁ、うん……」

○大通り・歩道（夜）

真琴以外に歩いている人はいない。
後ろから走る足音が近づいてくる。
真琴、不審者かと思い、逃げるように早歩きになる。
成瀬「高槻さん！」
真琴、驚いて足を止めて振り返る。
真琴「……成瀬くん！？」
成瀬「ごめん驚かせて」
真琴「……二次会は？」
成瀬「俺も帰ることにした！　それより駅あっちだけど大丈夫？」
真琴「……私幡ヶ谷だから歩いて帰ろうかなって……」
成瀬「マジ？　俺代々木上原だよ！」
真琴「……近くだったんだね！」
成瀬「俺も歩いて帰ろ。一緒にいい？」
真琴「……うん」
×　×　×
成瀬、横を歩く真琴をチラッと見る。
成瀬「高槻さんよく歩くの？」

真琴「……うん。散歩好きなんだ」
成瀬「俺も好き！　散歩しながら店開拓してる。この間池袋にいいカフェ見つけてさ」
真琴「私も池袋にお気に入りのカフェある。パンとかドーナツが人気のお店なんだけど」
成瀬「それもしかして……」
真琴と成瀬、同時に、
真琴「入り口におっきいクマのぬいぐるみがいる！」
成瀬「入り口にでっかいクマのぬいぐるみがいる！」
その後間髪入れず、
真琴と成瀬「ハッピーアイスクリーム！」
と、ハモる。笑い合う２人。
成瀬「俺ちょっと言うの遅れたわー」
真琴「じゃあ私の勝ちかな……あれ、何の話してたんだっけ？」
成瀬「あれだよ、クマのカフェが美味いって話」

真琴「そうだった。最近あそこ行けてないなぁ。散歩も夜近所のコンビニ行くくらい」
成瀬「1人で？」
真琴「うん」
成瀬「女の子1人で夜散歩は危ないって！」
真琴「もう女の子って年じゃないよ（苦笑）」
成瀬「じゃあ散歩したい時連絡して。いつでも付き合うから！」
真琴「……う、うん」
成瀬「（笑いながら）それ絶対連絡してくれないやつじゃん。ダメだよ。マジで危ないから！　はい指切り」
と、小指を差し出す。
真琴、控えめに小指を出すと成瀬が指を絡める。
成瀬「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ーます。指切った！」
真琴、朗らかに笑う。
成瀬「高槻さん仕事は何してるの？」
真琴「私は病院で働いてる」

成瀬「もしかして、お医者さん……？」
真琴「（驚いて）……うん。よく分かったね」
成瀬「（興奮して）小学校の頃からなりたいって言ってたよな？　すげぇ、本当に夢叶えたんだ！」
真琴、目が点になる。
成瀬「（慌てて）ごめん、今のナシ！　キモいな俺。あの、ほら。すごく印象的だったからたまたま記憶に残ってただけで……」
真琴、クスクス笑う。
真琴「ちょっと恥ずかしいけど、でも覚えてくれてる人がいて嬉しい。成瀬くんは今何してるの？」
成瀬「俺は写真家。自分で言うのまだあんま慣れないんだけど」
真琴「……あぁっ！」
成瀬「ん？」
真琴「もしかして、これ成瀬くんの写真？」
真琴、スマホで撮った写真を見せる。
成瀬「そうそう！　工事現場のこういう囲い

って落書きされること多いらしくてさ。一面に絵とか写真があればそういうのなくなるんじゃないかって自治体のプロジェクトで、俺にもオファーくれて」

真琴「行政からのオファー！？　すごいね！」

成瀬「でもなんで俺だって分かったの？」

真琴「Ｊ.Ｎａｒｕｓｅってサイン見て、成瀬くんが思い浮かんだの。すごく綺麗な写真だから思わず撮っちゃった。まさか本当に成瀬くんの写真だなんてビックリ！」

成瀬、嬉しさを噛み締めるように口角を上げる。

真琴「（興味津々に）他にはどんな写真撮るの？」

成瀬「元々は風景写真メインだったんだけど、最近は人の依頼も多くて、たまに雑誌とか芸能人の写真集とかもやってる」

真琴「（目を輝かせて）そうなんだぁ」

○真琴のマンション・前（夜）

真琴「ごめんね。結局家まで送ってもらっちゃって」
成瀬「俺こそついてきちゃってごめん。高槻さんと話してたらあっという間だった」
真琴「……私も！　気を付けて帰ってね」
と、小さく手を振る。
成瀬「うん、おやすみ」
成瀬、数歩歩いてから振り返る。
成瀬「高槻さん！」
真琴「ん？」
成瀬「……良かったらまた会お！　せっかく住んでるとこも近いし。それにほら、アイス奢らないと！」
真琴「うん！　アイス、約束だからね！」
成瀬、何度も振り返り手を振る。
真琴も成瀬が見えなくなるまで見送る。

〇大学病院・産婦人科・休憩室
真琴、ソファでスマホを見る。
〈成瀬：今から行ってきます〉と飛行

機の写真が送られてくる。
〈真琴：行ってらっしゃい！　気をつけてね！〉と返信。

○同・仮眠室（深夜）
真琴、ベッドに寝ころんで成瀬とメッセージを交わす。
〈成瀬：今日こっちめちゃ寒い！　震えながら散歩してる〉
〈真琴：風邪引かないでね～〉
〈成瀬：今日当直？〉
〈真琴：そう！　今日は穏やかな日〉
〈成瀬：　そっか。俺さ月末には仕事がひと段落するんだけど、最後の週のどっか空いてる？　良かったら飲み行こ〉
真琴、メッセージを見て飛び起きる。
〈真琴：空いてる！　行きたい！〉
〈成瀬：店探しとく〉
真琴、足をバタバタさせて喜ぶ。

○真琴の実家・外観
２階建ての西洋風の一軒家。

○同・真琴の部屋
学習机とベッドがそのまま置いてある。
机の横の棚には赤本や参考書が並ぶ。
真琴、クローゼットを開けて段ボール箱を取り出す。
真琴「懐かしい！」
と、中を見ていく。

○同・リビング
真琴、テーブルで小学校の卒業アルバムを眺める。
香菜子「アルバムなんて見てどうしたの？」
と、母・高槻香菜子（５２）が隣に座る。
真琴「この間ね、６年生の時のクラスの同窓会行ってきたの」
香菜子「みんな元気だった？　垢抜けてカッ

コよくなってる子とかいた？」
真琴「お母さん成瀬くんって覚えてる？」
香菜子「どの子？」
真琴「この子！」
と、成瀬の写真を指差す。
香菜子「あー！　サッカーやっててすごい人気だった子よね」
真琴「そうそう。ほとんど話したことなかったのに、なぜか私が医者になりたいって言ってたの覚えててくれたんだよね」
香菜子「えぇ！」
と、嬉しそうに口元を手で押さえる。
香菜子「実は真琴のこと好きだったんじゃない？」
真琴「（笑いながら）そんなわけないじゃん」
〇大学病院・産婦人科・ナースステーション
真琴、パソコンでカルテを入力しながら、時間を気にする。
隣に座っている飛鳥が、

飛鳥「（ニヤニヤして）男と約束かー？」
真琴「……小学校の同級生とね」
飛鳥「やっぱりー。でもすごいね小学校って」
真琴「この間同窓会があったからそれで」
飛鳥「なるほど。それで忘れていたあの頃の恋心が、ね」
真琴「そんなんじゃないってばー！」
飛鳥「もし陣発来ても私が引き受けるから、サッと帰っちゃいな。今日暇そうだけど」
真琴「暇だって言うと大抵忙しくなるじゃん」
飛鳥「（自信満々に）なんか今日は大丈夫な気がする」
真琴「それならいいけど～」

○同・準備室（夜）

真琴と飛鳥、手を洗いながら、
飛鳥「ほんっとごめん。暇なんて恐ろしい言葉、金輪際二度と、一生口にしない！」
真琴「１７時過ぎて飛び込み出産、陣発経産婦、緊急カイザーはさすがに笑っちゃった

よ。飛鳥の勘外れすぎ」

飛鳥「ほんとごめん！　早く待ち合わせ行って！」

真琴「うん、ありがと。お先！」

○同・廊下（夜）

真琴、小走りしながらスマホを取り出す。

しかし、画面を見てその足が止まる。

２時間前に成瀬から〈成瀬：飛行機出発遅れて、多分間に合わないからリスケさせてください。本当にごめん〉とメッセージ。

〈真琴：私も今終わった！　また今度ぜひ！〉と返信。肩を落として歩く。

○住宅街・道（夜）

真琴が歩いていると、成瀬から着信。

真琴「もしもし！」

成瀬の声「今日はほんとごめん！」

真琴「お互い様だよ。お疲れ様」
成瀬の声「高槻さんもお疲れ。今日赤ちゃん産まれた？」
真琴「産まれたよ。夕方から一気に３人！」
成瀬の声「３人も！？」
真琴「世界では確か１日に３０万人以上の赤ちゃんが毎日生まれてるからね」
成瀬の声「そうか～でもこんな広い世界でさ、同じ日に同じ国の同じ病院で３人も生まれるって、超ミラクルじゃない？」
真琴「なんか成瀬くん嬉しそうだね」
成瀬の声「俺、奇跡とか運命とか結構信じるからさ。だから成瀬さんともまた会えたんだと思ってる。今日はちょっと飛行機遅延に邪魔されたけど」
真琴、コンビニの前で立ち止まる。
真琴「……あのさ。もし、成瀬くんさえ良ければ今から会わない？　疲れてたら５分だけでもいい！　ほら、私まだアイス奢ってもらってないから！」

成瀬、電話口で笑う。
真琴「（戸惑いながら）笑わなくても……」
成瀬の声「だって高槻さん。後ろ見てよ」
真琴が後ろを向くと、成瀬が手を振っている。
真琴「（興奮して）こんなことある？」
成瀬の声「なんか高槻さん嬉しそう」
真琴「（嬉しそうに）だって私も奇跡とか運命とか、結構信じるから」

×　×　×

真琴と成瀬、並んで歩く。
真琴はアイスキャンディーを食べている。
成瀬「ほんとにそれで良かったの？」
真琴「うん。子供の頃から好きなんだ～」
と、美味しそうに食べる。
成瀬、鞄からそっとカメラを取り出してシャッターを切る。
真琴「ちょっとー。食べてるところは恥ずかしいよ」

成瀬「だってすごくいい顔してたから」
真琴「成瀬くんも食べない？　美味しいよ」
と、アイスを差し出す。
成瀬「……じゃあいただきます」
成瀬、アイスを持った真琴の手を上から握る。
口を近づけてアイスを食べると見せかけ、真琴の唇にキス。
真琴、目を見開く。
触れるだけのキスで、ゆっくり唇を離す。
見つめ合う2人。
成瀬「俺さ、小学生の時ずっと高槻さんのことと好きだったんだ」
真琴「（ギョッとして）私！？　ほとんど話したことなかったのに……？」
成瀬「うん。だからなんとか話すきっかけつくりたくて、体育の時とかわざと転んで怪我したりしてた。高槻さん保健委員だったからさ」

真琴「もしかして、保健委員が保健室まで付き添うから？」
成瀬「バカだろ？　でも結局他の子たちが付き添ってくれることになって、作戦失敗。一番振り向いて欲しい人には４年間空振りし続けた」
真琴「全然気づかなかった……」
成瀬「頭の回転速いし、周りのこともよく見てるのに、自分のことになると急に疎くなるんだよ高槻さん。でもそういうとこも俺は好き」
真琴「えぇ……？」
成瀬「同窓会で再会してから、俺ずっと浮かれてた。もちろんあの頃の高槻さんも好きだったけど、今目の前にいる高槻さんから目が離せなくて。前よりもっと好きになってた」
成瀬、くしゃっと笑う。
真琴「……私も。同窓会で会った時から、ずっとドキドキしてる。成瀬くんのことばっ

かり考えてる」
見つめ合い、今度はどちらからともなくお互い顔を近づける。
成瀬は真琴の後頭部に手を回し、真琴は成瀬の服の裾を掴む。

○バル・店内（夜・日替わり）
めぐみ、店内をキョロキョロ探す。
大津が１人で座っているのを見つける。
めぐみ「大津ー！」
と、手を振って近づく。
大津「おー久しぶり！」
めぐみ「あれ、肝心の主役たちはまだ？」
大津「樹吏はもうすぐ着くって。高槻さんは？」
めぐみ「真琴ももうすぐだって」
大津「じゃあ待ちますか」
めぐみ「お互いの親友が１５年ぶりの再会で結ばれるなんて。なんか感慨深いね」
大津「しかも樹吏は小学校の頃から好きだっ

たらしいし。ずっと近くにいたけど全然気づかなかったわ」
めぐみ「あー気づかなそう。だって大津はただのサッカーバカってイメージ」
大津「いや言い方！　純粋なサッカー少年って言えよ！」
×　×　×
真琴と成瀬も合流し、テーブルには酒や料理が並ぶ。
大津「(ニヤニヤして)それで、どうなんだよ。付き合った感想は」
成瀬「どうって……幸せデスケド？」
めぐみ「デートとかしてる？」
真琴「デートらしいデートはまだ全然できてないね？」
成瀬「お互いの家行き来するくらいかな」
大津「世界を飛び回る写真家と大学病院のお医者様だもんなぁ。そりゃ忙しいわ」
真琴「でも住んでる所が近いから良かったね」
成瀬「だな！」

めぐみ「真琴。やっぱりお守りの効果バッチリだったじゃん」
真琴「（嬉しそうに）うん！」
成瀬「お守り？」
真琴、縁結守を出す。
真琴「ちょっと前にね、めぐみと出雲大社でお守りをもらってきたの。その後、めぐみは彼氏できたんだけど、私は全くその気配がなくて」
めぐみ「だから私が『持ってるだけじゃ意味ないよ』って、同窓会に参加させたの」
真琴「そしたら樹吏くんと再会できた」
成瀬「じゃあ橘さんと出雲の神様のおかげなんだ！　ありがとうございます」
と、めぐみに手を合わせる。
大津「おい！　俺もだろ？　高槻さんが同窓会に来るって教えてやったの俺だからな！？　もう忘れたのかこの恩知らず！」
成瀬「（笑いながら）もちろん分かってるって。感謝してる」

真琴「大津くんありがとう！」
めぐみ「人のキューピッドやってる場合じゃないけどね」
大津「それを言うな――――」
と、耳を塞ぐ。
一同、盛り上がる。

○住宅街・道（夜）
真琴と成瀬、歩きながら、
成瀬「今日はうち来なよ」
真琴「いいの？」
成瀬「もちろん」
と、手を差し出す。
真琴、成瀬の手を握る。
真琴「アイス買ってく？」
成瀬「じゃあ勝った方の奢りで」
真琴「よーーし！　今日こそ勝つ！」
楽しそうに歩く２人。

○成瀬のマンション・寝室（朝）

カーテンから陽の光が入り込む。
成瀬が目を覚ますと隣には真琴の寝顔。
成瀬、そっとスマホで寝顔を撮影。カシャッという撮影音。
真琴「んッ……」
成瀬、スマホを戻す。
成瀬「おはよ」
真琴「（掠れた声で）おはよ。樹吏くんまた芸術的な髪になってるよ」
と、成瀬の寝ぐせを撫でる。
成瀬「なんでだろ。そんな寝相悪くないはずなのに」
真琴「頭だけすごい動いてるとか？」
成瀬「それヤバいな」
と、笑いながら真琴を抱きしめる。
成瀬「……俺さ、ちょっと考えたんだけど」
真琴「うん？」
成瀬「俺らお互い不規則で、なかなか予定合わないじゃん？　デートもろくにできないし」

真琴「（不安そうに）……うん」
成瀬「だからさ……一緒に住まない？」
真琴、目を見開いて成瀬の胸に顔を埋める。
真琴「なんだぁーーー」
成瀬「（不思議そうに）真琴？」
真琴「起きてすぐフラれるのかと思った」
成瀬「そんなわけないじゃん」
真琴「一緒に住むのはもちろん賛成！」
成瀬「よし、そうと決まれば！」
と、起き上がる。
真琴も引っ張られる。
真琴「？」
成瀬「挨拶行こ！　真琴の実家！」

○真琴の実家・リビング
真琴と成瀬と香菜子がテーブルを囲む。
テーブルにはお茶やお菓子。
香菜子「それにしても、成瀬くん昔もカッコよかったけど、ますますカッコよくなって

私までドキドキしちゃう！」
真琴「お母さんはしゃがないでよ」
成瀬「（笑顔で）ありがとうございます」
香菜子「ごめんね、この子料理とか全然だと思うけど」
真琴「最近は頑張ってるもん！」
成瀬「俺は特に真琴さんの麻婆豆腐が好きで、よくリクエストしてます」
香菜子「どうしよう、今すごくキュンとしちゃった。もっと聞かせて２人の話！」

○住宅街・道（夕方）
ランドセルを背負った下校中の小学生たちが歩いている。
真琴と成瀬、集団にまざって歩きながら、
成瀬「うちは別に気にしなくていいのに」
真琴「そういうわけにはいかないよ！　ちゃんとご挨拶しないと」

○成瀬の実家・リビング
真琴「これ、お口に合うといいんですが。今結構流行ってるお菓子なんです」
と、母・成瀬智美（５８）にお菓子を渡す。
智美「わざわざありがとうね」
リビングのソファでは姉・細谷侑里（３３）が座っている。お腹が大きい。
侑里「真琴ちゃんも座って座って」
真琴、隣に座って、
真琴「もしかして……？」
侑里「そう。ちょうど３６週。まだもう少しだけど、結構きつくって」
と、お腹を撫でる。
真琴「お腹、触らせてもらってもいいですか？」
侑里「もちろん！」
真琴、お腹を撫でながら、
真琴「はじめまして高槻真琴です。ママのお腹気持ちいいよねぇ。みんな待ってるから

安心して出ておいでー」
成瀬「真琴は産婦人科のドクターだから、プロだよ」
侑里「あんたそんなすごい人とお付き合いさせてもらってるの！？」
智美「思い出した！　高槻真琴ちゃんって昔から優秀で。ほら、樹吏がよく話してた子でしょ？」
成瀬「（照れながら）うん、母さんちょっとその話はストップ」
侑里「へぇ～樹吏が柄にもなく照れてるぅー！　お母さん、もっと聞かせて！」
成瀬「マジでやめて！」
侑里「嫌なら自分の部屋行ってなよ！　私たちは3人でガールズトークするから。ねー？　真琴ちゃん」
真琴「私も、樹吏くんの昔の話聞きたいです！」
成瀬、気恥ずかしそうに耳を塞ぐ。

○住宅街・道（夜）
薄明かりの街頭の道を真琴と成瀬が手を繋ぎながら歩く。
成瀬「夜ご飯まで付き合わせてごめんな」
真琴「私大丈夫だった？　ちゃんと話せてたかな？」
成瀬「バッチリ。母さんも姉ちゃんも超喜んでたよ」
真琴「良かった」
と、成瀬の肩に頭を寄せる。
小学校の校舎が見えてくる。
真琴「わぁ懐かしい！」
成瀬「ちょっと来て」
と、真琴の手を引く。

○小学校・外壁（夜）
蔦の絡んだ錆びついた扉。
成瀬「確かプールんとこに繋がってたんだけど、まだ開くかな」
真琴「さすがに鍵かかってるでしょ～」

成瀬「開けるよ」
真琴、頷く。
ギィィーッと音を立てて扉が開く。
成瀬「うわ！」
真琴「開いた！」

○同・プール（夜）
プールには水が張られていて、水面に月が映る。
真琴「プール入る前に、超冷たいシャワー浴びさせられてたの覚えてる？」
成瀬「通称・地獄のシャワーっしょ？」
真琴「そうそれ！　あれまだやってるのかな？」
真琴、シャワーの方を見に行く。
成瀬、プールを覗き込んでいると、指輪が指から抜け落ちてプールに落ちる。
しゃがんで手を伸ばすが、指輪は沈んでいく。
体勢を崩して成瀬がプールの中に落ち

る。
バシャーンという音で真琴が戻ってくる。
真琴「樹吏くん！？　大丈夫！？」
真琴、プールサイドに膝をつく。
成瀬、水中から顔を出す。
成瀬「（笑いながら）指輪拾おうとしたら普通に落ちた」
真琴「もーびしょ濡れじゃん」
と、成瀬の顔周りをハンカチで拭き、濡れた前髪を整える。
成瀬「水も滴るいい男って言うじゃん？」
真琴「ふふっ。風邪引いても知らないよ」
と、両手で成瀬の頬を包み込む。
プールの水面に映った２人の姿が重なる。

○成瀬のマンション・キッチン
真琴、食器を棚に入れようと背伸びをする。

成瀬「あー！　俺やるやる」
成瀬、真琴の背後から手を伸ばして食器を入れる。
真琴「ありがと」
成瀬、後ろから抱きしめるように真琴の前に手を回し、頭に顎を乗せる。
成瀬「夜どうする？　なんか食べ行く？」
真琴「せっかくだし、一緒に作らない？」
成瀬「じゃあ買い出しだな」

○スーパー・店内（夕方）
成瀬、カートを押して真琴についていく。カゴの中には麻婆豆腐の材料。

○成瀬のマンション・キッチン（夜）
エプロンをした真琴と成瀬、並んで料理をする。
真琴、フライパンの麻婆豆腐をスプーンで一口掬って味見。
真琴「んー！　いい感じ！」

成瀬「どれどれ」
と、真琴の唇にキス。
真琴「味見したいならちゃんとあげるから！」
成瀬「これが俺流の味見なの！」
真琴「それじゃあ全然味分かんないでしょ？」
と、スプーンですくって成瀬に食べさせる。
成瀬「んー最高！」

○同・リビング（夜）
真琴と成瀬、アルコール缶を飲みながらソファでくつろぐ。
成瀬、真琴の左手を取り、しきりに指の付け根のあたりを確かめるように触る。
真琴「どうしたの？」
成瀬「んー？　いや、真琴の生命線短いなって」
真琴「（焦って）ほんと！？　樹吏くんの見せて」

と、成瀬の手のひらを触る。
真琴「いいなー樹吏くんのすごい長いよ！」
成瀬「なぁ、くすぐったいって」
真琴「（嬉しそうに）おっと。もしかして私、樹吏くんの弱点見つけちゃった？　ノーベル賞とっちゃう？」
成瀬「真琴、酔ってるね」
と、スマホのカメラで撮影。
真琴「ちょっと飲みすぎたー」
と、顔を隠すように成瀬に抱きつく。
成瀬「俺いつか真琴の写真集作りたい。そうだ！　俺が撮った真琴を、渋谷のスクランブル交差点にあるでっかい看板に載せるのもいいな～」
真琴「もう何言ってるの樹吏くん。それは無理だよ」
成瀬「あーでも待って、やっぱダメ。誰にも見せたくない！　けど見て欲しい！　可愛くて可愛い俺の大好きな真琴を！」
真琴「樹吏くんもだいぶ酔ってるね」

壁には２人の写真がいくつも飾られている。

○大学病院・産婦人科・ナースステーション
真琴、電子カルテを入力している。
大島がやって来て、
大島「高槻、緊急カイザー入って！」
真琴「分かりました！」
と、立ち上がる。

○同・手術室の前
手術室から出てくる真琴と大島。
大島「お疲れー。高槻、腕上げたな」
真琴「ありがとうございます！」

○同・廊下
真琴と大島、歩きながら、
真琴「大島先生って、何年か海外行かれてたんですよね？」
大島「行ってたよー。シリア２年、ウガンダ

1年。大変だったけど、あれは貴重な経験だったなぁ。高槻海外興味あんの？」
真琴「国境を越えて活躍できる医者になるのが子どもの頃からの夢なんですけど……」
大島「イケメン彼氏と遠距離になるもんな。あ、今のセクハラ？」
真琴『『セクハラ？』って聞くのもハラスメントらしいですよ」
大島「（顔を顰めて）ややこしい世の中になったもんだ」
真琴「遠距離は、意外と大丈夫かなぁと思ってるんですけど、結婚とか出産とかその先のこと考えると、なかなか踏み出せなくて。この仕事してると、年齢重ねるリスクは嫌というほど見ちゃうので」
大島「じゃあ逆に今しかないな」
と、真琴に書類を渡す。
真琴「なんですかこれ？」
大島「ザンビアの国立病院とうちの病院の交換留学制度。1年間向こうの病院で働ける。

農村部じゃないからある程度生活はしやすいし、もちろん村とかに出張健診も行くからガッツリ経験も積める。なかなか悪くないと思うぞ」

真琴、真剣に資料を見る。

大島「もし高槻が興味あるなら、俺が推薦してやれるから。ちょっと考えといて」

真琴「ありがとうございます！」

○都心・大通り（夜）

成瀬がキャリーケースを引いて、ジュエリーブランドのショーケースの前で止まる。

眺めていると、突然視界が大きく揺れる。壁に手をついてなんとかバランスを保つ。顔は青白く、呼吸が浅い。呼吸を整えてから店の中に入る。

○本屋・店内（夜）

真琴、医学書の棚で分厚い参考書や、

海外派遣の医師の自伝を眺める。
×　×　×
参考書を抱えてレジに向かう真琴。
平置きされているウェディング雑誌が目に留まり、数ページめくる。

○成瀬のマンション・リビング（夜）
真琴と成瀬が食事をしているが、成瀬の箸が進んでいない。
真琴「ごめん、味変だったかな？」
成瀬「違う！　真琴のごはんは美味いんだけど、最近あんまお腹空かなくて」
真琴「他に気になる症状ある？」
成瀬「多分ちょっと疲れがたまってるだけ。ちゃんと寝たら良くなると思う」
真琴「（心配そうに）顔色良くないし、樹吏くん痩せた気がする」
成瀬「マジ？　どうりでますますカッコよくなったわけだ」
と、カラ元気。

真琴「同棲始めてから……？　もし樹吏くんのストレスになってるんだったら私……」
成瀬「ストップストップ！　そんなわけないじゃん！」
真琴「でも……」
成瀬「分かった。次の休み駅前のクリニック行ってくるから。な？」
真琴、頷く。
成瀬「（ニコッと笑って）俺風呂入ってくる」
と、真琴の頭にポンと手を乗せてリビングを出る。
真琴、心配そうに背中を見つめる。

○クリニック・診察室（朝）
老医「今の段階で具体的に診断はありません」
成瀬、ホッとした表情。
老医「ただ、この白血球数が基準を超えているのが気になります。大学病院の紹介状を書くので受診してください」
成瀬「どこか悪いってことですか？」

老医「それも含めて、大学病院で検査してもらってください」
成瀬「……分かりました。ありがとうございます」

○同・待合室

成瀬、紹介状の封筒を見る。芝浦大学附属病院、と。

○成瀬のマンション・リビング（夜）

真琴「え……？」
真琴と成瀬、向かい合って夕食を食べている。
成瀬「だから明日、真琴の病院行くね。真琴が仕事してるとこ覗きたいな～」
真琴「どこが悪かったの？　先生はなんて？」
成瀬「なんだっけ……あの白血球？　がほんの少し高いって。ほんと少しだけ」
真琴、顔が曇る。
成瀬「……大丈夫！　念の為だから。なんか

口コミ見てたら、あそこのおじいちゃん先生かなり心配性らしい！」
真琴、納得していない。
成瀬「最近仕事入れすぎてたからさ。なんか食欲も戻って、食べれてるし！」
と、大袈裟に食べる。
真琴「……うん」
真琴の食事は進んでいない。

○大学病院・消化器外来診察室
成瀬、診察室から出てくる。
成瀬「ありがとうございました」
と、至って普通の表情。

○同・待合室
成瀬、椅子に座って呼ばれるのを待つ。
侑里から〈侑里：無事産まれました〉
とメッセージがくる。
〈成瀬：めでとう！　今度会いに行くね〉と返信。

○同・産婦人科・休憩室

真琴、不安げな顔でスマホを握りしめる。

画面には成瀬とのメッセージ。

〈真琴：どうだった？〉というメッセージに既読がついてない。

真琴、スマホを白衣のポケットに入れて部屋を飛び出す。

○同・消化器外来診察室

同期・水野勇哉（２７）、電子カルテを入力している。

扉をノックする音。

水野「どうぞー」

真琴「お疲れ」

水野「高槻じゃん。どうしたこんなとこ来て」

真琴「久々に顔見たくなって」

と、缶コーヒーを渡す。

水野「なになに、毒とか入ってないよな？」

真琴「サイテー。返して」

水野「ウソウソ。で、どうした？」
真琴「今日、成瀬樹吏って患者さん来たでしょ？」
水野「成瀬樹吏……？」
と、カルテで検索してデータを確認。
水野「あー紹介状の人か。来た来た。高槻の知り合い？」
真琴「うん……どうだったかちょっと心配で」
水野「そっか……」
気まずい空気が流れる。
真琴「あーごめんやっぱなんでもない！　忘れて！」
水野「……」
真琴「……彼、あんまり良くない？」
水野「……いや」
真琴の顔が明るくなる。
真琴「なんだ、良かったぁ……うちの紹介状もらったって聞いたからもうビックリしちゃって。大したことないならいいの。やっぱあのクリニックの先生ほんとに心配性な

んだ～」
と、矢継ぎ早に話す。
水野、言いづらそうに黙ったまま。
真琴「どうしたの？　何か言ってよ……」
水野「……良くないとかじゃないんだ」
真琴「（笑顔が消えて）え……？」
水野「はっきり言って、かなり悪い……」
無機質な時計の秒針の音。
真琴「……ちょっと何言ってんの。ねぇ、詳しく説明して」
水野「（諭すように）高槻……」
真琴「いいや、とりあえず検査の結果見せて。色々撮ったでしょ」
と、カルテを見ようとマウスに触る。
水野「高槻！」
と、真琴の手を止める。
真琴「お願い、大事な人なの！」
水野「だとしたら尚更、患者本人の同意なしに教えるわけにはいかない」
真琴、訴えかけるような目で水野を見

る。
水野「ごめん、気持ちは分かるけど……知りたいなら本人に聞いて」
真琴、口をつぐんで俯く。

○成瀬のマンション・部屋の前（夜）
真琴、呼吸を整え、心してドアを開ける。
玄関には成瀬の靴が綺麗に並ぶ。

○同・リビング（夜）
成瀬「おかえりー！　仕事お疲れ！　なんとなんと今日は俺の手作り餃子デース！」
と、テンションが高い。
真琴「……今日病院来たんだよね」
成瀬「行ったよ！　真琴の病院超綺麗だね」
真琴「……検査したでしょ？　どうだった？」
成瀬「うん、問題なかった！　心配かけてごめん。やっぱあのおじいちゃん先生ただの心配性だよ」

真琴、無言で寝室の方に行く。
成瀬「（焦って）ちょっ、真琴！」
○同・寝室（夜）
真琴、成瀬の鞄を開けて病院の封筒を取り出す。
成瀬、真琴から封筒を奪い、届かないように高く上げる。
真琴「問題なかったんでしょ？　だったら見せてよ」
成瀬「そうだけど、なんか恥ずかしいからヤダ」
真琴「……樹吏くんのカルテ見ちゃった。だから知ってる」
と、嘘をつく。
成瀬「……マジ、か……」
と、手が下がる。
成瀬「（けろっと）どうだった？　あの若い先生の診断合ってた？」
真琴、成瀬の手から封筒を取って中の

書類を確認する。
成瀬「なんか膵臓の腫瘍がすごくおっきいんでしょ？　先生曰く、他にもかなり転移してるらしく、て……」
バサっと書類が落ちる音。
真琴が震える手で書類を拾う。
成瀬、真琴から書類を取り上げる。
成瀬「嘘じゃん……ほんとはカルテなんて見てなかっただろ！？」
成瀬、肩で息をしながら悲痛な目で真琴を見つめる。
真琴「（震える声で）それ違うよね？　樹吏くんのじゃないよね？」
と、書類を指差す。
成瀬、真琴を優しく抱きしめる。
成瀬「……膵臓がん。もって半年だろうって……」
真琴、成瀬の腕の中で首を横に振る。
真琴「ねぇ、お願い！　嘘だって言って……」
真琴の頬を涙が伝う。

成瀬「ごめん……ごめんな……」
と、真琴の後頭部を撫でる。

○同・リビング（夜）
真琴、テーブルにノートパソコンを開いて何やら入力する。

成瀬「真琴？」

真琴「うちの診断がたまたまそうだっただけで、正しいか分かんないから」

成瀬、真琴を諭すように、

成瀬「芝浦大の大学病院だよ？　間違えるわけ……それに真琴だって……」
と、言いかけてやめる。
真琴は集中していて何も聞こえていない。

○同・寝室（朝）
成瀬、目が覚める。
隣には誰もおらず、寝た形跡もない。

○同・リビング（朝）

座ったままテーブルで眠っている真琴。パソコンは開いたままで、テーブルの上には病院のＨＰや、真琴が作った全国・全世界の医者の名前と連絡先が書かれたリストが印刷されている。

成瀬、身を切られるような思いで真琴の顔に手を伸ばす。

しかし触れるのをやめて、手を握りしめる。

○成瀬の実家・リビング

智美「樹吏たち来てくれたよ」

父・成瀬晃（６２）、ソファから立ち上がる。

真琴「はじめまして、高槻真琴です。樹吏さんとお付き合いさせていただいてます」

晃「樹吏の父です。息子がお世話になってます」

成瀬「ちょっと父さんたちに話がある」

智美「どうしたのよかしこまって」

×　×　×

晃と智美と侑里と成瀬、テーブルで会話。

真琴は離れた所で甥・細谷奏多（０）をあやしている。

智美「治療できるのよね？　これだけ医学も進歩してるんだし、いい薬がたくさんあってよくテレビでやってるし」

侑里「別の病院にも行って意見聞いた方がいいんじゃない？　なんて言うんだっけ、セカンドなんとかってあるじゃん」

成瀬「（穏やかに）行ったよ。真琴も色んな所に連絡してくれて。でもどこも診断は同じだった。よくここまで普通に生活してこれたねって驚いてた」

侑里「そんな……」

晃「……それで、今後の治療はどうなるんだ？」

成瀬「俺の場合はもう手術で取り除ける段階

じゃないから、緩和ケアか化学療法の二択らしい。化学療法もそんなに効果は期待できないらしいけど、でも俺は頑張ろうと思ってる」

晃「そうか……」

智美「そうかってあなた……！」

晃「騒いだって何も変わらない。それに、今一番不安なのは樹吏だぞ」

智美「……」

侑里「……そうだね」

成瀬「ごめん。せっかくおめでたいのにこんな話して」

侑里「それは私だよ！　そんなことも知らずに、呑気にメッセージなんて送って……」

成瀬「それは全然。むしろ癒されたんだ」

×　×　×

成瀬、幸せそうに奏多を抱いている真琴を切ない表情で見つめる。

晃「彼女、お医者さんなんだって？」

成瀬「そ。だからこそ、余計不安にさせてる

と思う……」
晃「樹吏」
成瀬「ん？」
晃「自分のことだけ考えなさい。お前の人生だ。誰とどこでどうやって生きるのか、お前が中心で決めればいい。無理も我慢もするな」
成瀬、晃の顔を見て瞳が揺れる。
成瀬「ありがと、父さん」

○大学病院・食堂
真琴、1人で食事をしながら印刷した論文を読む。全て膵臓がんに関するもの。
水野「お疲れ。ここいい？」
真琴「もちろん」
水野、真琴の前に座る。
真琴「この前は無理言ってごめんね。ちょっとどうかしてた……」
水野「成瀬さんとは話せた？」

真琴「うん。全部聞いた」
水野「そうか……ちゃんと食べて睡眠とってるか？」
真琴「うん。食欲がない時はそれでも食べれそうなものを頑張って食べてるかな。夜は眠剤飲んでるみたい。処方してくれたんでしょ？」
水野「いや、成瀬さんもだけど。俺が聞いてんのは高槻のこと」
真琴「私？　私は別になんともないよ」
しかし、真琴の食事は進んでおらず、頬がやつれている。
水野「心配だと思うけど、高槻が根詰めすぎるなよ」
真琴「うん、ありがと」

○成瀬のマンション・リビング（夜）
成瀬、ソファに座って郵便物を眺める。
そのうちの1枚に葬儀場のチラシ。
ため息をついて古紙の箱に入れに行く。

箱の中に捨てられた交換留学の冊子を見つける。

成瀬「これ……」

と、ページをめくる。

成瀬、ポケットからスマホを取り出して大津にメッセージを送る。

〈成瀬：明日の夜暇？　話したいことがある〉

〈大津：ヒマー〉と、ＯＫのスタンプ。

○大学病院・消化器内科・小部屋

医師・藤井正彦（５０）と水野の前に成瀬と智美が座り、資料を見ながら説明を受ける。

藤井「こちらからは以上ですが、何か質問はありますか？」

成瀬「俺が入院してることって、他の科の先生とかもカルテで見れるんですか？」

水野「（あぁ……）」

藤井「所属科以外の患者情報は許可がないと

閲覧できないようになってますから、安心してください。うちにどなたかお知り合いでも？」

成瀬「いえ。ならいいんです」

智美、悲しそうな表情をする。

水野「苦しい１ヶ月になると思いますが、効果が出れば通院しながらの治療という選択肢も見えてきます。私たちも全力でサポートしますので」

智美「よろしくお願いします！」

と、頭を下げる。

成瀬も頭を下げる。

○公園（夜）

街灯が照らす静かな公園。

成瀬と大津、それぞれブランコに座る。

大津「急にブランコ乗りたくなったわけ？」

と、笑いながらブランコをこぐ。

２つのブランコがギコギコ音を立てる。

成瀬「啓太ー！」

大津「んー！」
成瀬「俺、あと半年で死ぬらしい！」
大津「はぁ？」
と、笑いながら横を見る。
成瀬、空を見ながらブランコを漕ぎ続ける。
大津「意味わかんないんだけど……」
と、足をついてブランコを止める。
成瀬「（明るく）膵臓がん！　あと半年らしいよ、俺の余命！」
大津「……がん？　半年？　樹吏が？　お前さ。ちょっとカッコいいからって何言っても許されると思うなよ」
成瀬「ふはっ。きっつ」
大津「……なぁ、マジで言ってんの？」
成瀬「最初から大マジだって」
大津「どこのヤブ医者行ったんだよ。そうだ、高槻さんに診てもらえばいいじゃん」
成瀬「……医者ってさ、自分の専門外のことは分かんないことも多いんだよ。そりゃそ

うだよな。普段キーパーのやつが試合でいきなりフォワードとか無茶だしな」
大津「まぁ確かに……」
成瀬「真琴は産婦人科だから、本来は専門外のはずなんだよ。なのに、俺の結果見た真琴の顔、真っ青だった」
大津「……」
成瀬「真琴の顔見て実感したよ。あぁ、病院で医者に言われたことは本当だったんだ、って」
大津「膵臓ってあれだろ。浜辺美波の映画の」
成瀬「きみの膵臓を食べたい？」
大津「それそれ。何する臓器なのかとか忘れたけどさ、俺別にいらないから！　だから、俺の膵臓半分お前に移植すればいいよ！　それで解決だろ？　なぁ！」
　と、成瀬の肩を掴む。
成瀬「……（ニヤっと）お前の膵臓かぁ」
大津「（鼻声で）俺のじゃ不満かよ。ほんとわがままなやつ。これだからイケメンは」

大津、成瀬の肩に手を置いたまま顔を逸らす。
大津が鼻を啜る音が鳴り続ける。
成瀬、唇を噛み締めながら涙がこぼれないように空を見上げる。
×　×　×
大津「入院すること、高槻さんも知ってんの？」
成瀬「いーや！　言うつもりない。真琴とは別れるし！」
大津「ちょっと待てよ」
成瀬「何も言わずに消えるから、何か聞かれても黙ってて。これ以上真琴を俺のゴタゴタに巻き込みたくないんだわ……」
大津、大きなため息をつく。
大津「……わかった」
成瀬「あとさ、もう１つ」
大津「今度はなんだよ」
成瀬、指輪の箱を差し出す。
大津「これって……」

成瀬、頷く。
大津「ムリ」
成瀬「……頼む。自分で持ってんのは悲しいからさ」
大津、再び大きなため息をつく。
大津「これはデカい貸しだからな！　俺より長生きして、一生俺に恩返ししろよ！」
と、手のひらを出す。
成瀬「……精一杯努力はする」
成瀬、指輪の箱を大津に渡す。

〇成瀬のマンション・玄関（朝）
成瀬、真琴を見送る。
真琴「当直だから、明日帰ってくるね」
成瀬「うん、気をつけて」
真琴「何かあったら連絡してね」
成瀬「分かった」
真琴「じゃあ行って来ます」
真琴を引き止めようと成瀬の手がピクっと動くが、

成瀬「（笑顔で）行ってらっしゃい」
と、手を引っ込めて見送る。
○大学病院・産婦人科・ナースステーション
ナースステーションは静かで穏やか。
飛鳥「今日なんかヒ……いや、やっぱなんでもない」
真琴「ダメだよ。私今日当直だからできればこのままいってほしい」
と、願うように手を合わせる。
飛鳥「この話はもうやめとこ」
真琴と飛鳥、黙り込む。
研修医・町田海斗（２５）がやって来て、
町田「お疲れ様です。今日ヒマですね！　毎日これがいいなー」
飛鳥「あぁーー！」
真琴、「あちゃー」という顔をする。
町田「（慌てて）俺なんかマズいこと言いました！？」

飛鳥「ドンマイ」
と、真琴の肩に手を置く。
町田「え、え！？」
真琴「町田くんも、いつか経験するよ」
町田、不思議そうな顔をする。
ナースステーションから見える窓の外は曇天。

○同・休憩室（日替わり）
真琴、ソファでうつ伏せに伸びている。
飛鳥「お疲れー。大変だったね。今日朝来てビビったよ」
真琴「申し訳ないけど、町田くんを恨む」
飛鳥「今度アイツが当直の時経験させてあげよう。例の言葉を軽々しく口にすることの恐ろしさを……」
真琴「さんせ〜」
と、力無く手を挙げる。
休憩室の窓の外は雨上がりの晴天。

○成瀬のマンション・玄関（夜）
真琴「ただいま」
と、玄関に入る。
玄関に靴はなし。
部屋の中も暗い。

○同・リビング（夜）
真琴が電気をつけるが誰もいない。

○同・寝室（夜）
真琴「（小声で）樹吏くん？」
と、部屋を覗くが誰もいない。

○同・トイレの前（夜）
真琴「樹吏くん？」
と、ドアをノックして開けるが中は暗い。

○同・風呂場（夜）
真琴、風呂場を覗くが誰もいない。

○同・リビング（夜）

真琴、テーブルの上のメモと鍵に気がつく。

【今までありがとう　樹吏】と書かれている。

真琴「……え？」

すぐに成瀬に電話をかけるが、繋がらない。

続いて、メッセージを送る。

〈真琴：今どこにいる？　話したい〉

真琴、床に座り込み茫然とする。

床に置かれた真琴の鞄が倒れ、中から縁結守がソファの下に転がる。

真琴は気づいていない。

○同・リビング（朝）

真琴、床の上で目を覚ます。

怠そうに起き上がり、スマホのメッセージを確認。

成瀬から返事はない。

真琴の表情が曇る。

○会社・社内

大津、デスクでスマホを見る。

真琴から〈真琴：樹吏くんどこにいるか知ってる？〉とメッセージがきている。

〈大津：知らないけど、何かあった？〉と返事。

大津「樹吏……ほんとにこれでいいのかよ……」

○成瀬の実家・リビング

侑里「お母さん。真琴ちゃんから電話……」と、画面を智美に見せる。

智美「……私が話す」

と、電話に出る。

真琴の声「もしもし」

智美「もしもし真琴ちゃん？　樹吏の母です」

真琴の声「突然電話してしまってすみません。

あの、樹吏くん今そちらにいますか？」
智美「……あのね、もううちにも樹吏にも連絡してこないでくれる？　ほっといてほしいの。真琴ちゃんなら分かってくれるわよね」
真琴の声「でも私！」
智美「ごめんなさい、ちょっと忙しいから切るわね」
と、電話を切る。

○大学病院・休憩室
真琴、耳からスマホを離してため息をつく。
立ち上がって部屋を出る。

○同・消化器外来診察室
いきなりドアが開いて真琴が中に入ってくる。
水野「びっ、くりしたぁー。なんだ高槻か。驚かせんなよ～」

真琴「成瀬さん、次いつ受診？」
水野「え、なになに？　なんて？」
真琴「成瀬樹吏！　膵臓がんの患者！　ケモ始めるでしょ？　次いつ来る？」
水野「あぁ、成瀬さんな」
真琴「ねぇ、教えて」
水野「前にも言ったけど、そんな簡単に教えられないのわかってるだろ？　俺のクビが飛ぶって」
真琴「お願い！　水野くんしか頼れる人いないの」
水野「気持ちはわかるけどさ。そんなの本人に聞けばいいじゃん」
真琴「だって……」
水野「患者本人が話してないことを、俺が言えるわけないだろ。悪いけどこればっかりは力になれない」
真琴「……そう」
と、フラフラ部屋を出ていく。
水野「ごめん、高槻……」

カルテの画面、入院患者一覧に成瀬樹吏の名前。

○バル・店内・テーブル席（夜）

真琴とめぐみと大津がメニューを選んでいる。

めぐみ「真琴の好きなカキあるよ！」

真琴「（上の空で）うん……」

大津「俺めっちゃ腹減ってるから色々頼もーっと！」

めぐみ「私も！　今日は飲みべーション超高い！」

と、大袈裟に盛り上がる。

真琴「ありがとね、２人とも（にっこり）」

めぐみ、泣きそうな顔で真琴の手を握る。

めぐみ「真琴……」

真琴「私も今日は久々にたくさん飲んじゃおっかなー！」

大津「いいねぇ、のものも！」

×　×　×

真琴「ちょっとお手洗い」

と、立ち上がる。

めぐみ「大丈夫？」

真琴「うん」

と、トイレに行く。

めぐみ「ダメ、見てられない。辛すぎる……」

大津、言葉を飲み込むようにグラスに残った酒を一気に流し込む。

○同・トイレ前（夜）

真琴、フラフラ歩きながら壁に寄りかかり、ずるずる座り込んで膝に顔を埋める。

×　×　×

めぐみ、うずくまる真琴を見つけて駆け寄る。

めぐみ「真琴！　大丈夫？　気持ち悪い？」

真琴、膝に顔を埋めたまま首を横に振る。

めぐみも隣にしゃがんで真琴の肩を抱き、優しくトントンとする。
めぐみ「ずっと我慢してたんだよね。よく頑張った……」
真琴の啜り泣く声。
大津、曲がり角で会話を聞く。
真琴「医者のくせに私、樹吏くんになんにもしてあげられない……これじゃあ意味ない……何のために医者になったか分かんないよ」
と、泣きながら訴える。
めぐみ「そんなことない。成瀬くん、真琴がいてすごく心強かったと思う。誰も悪くないんだから、自分を責めちゃダメ！」
大津、拳を握りしめる。

○同・テーブル席（夜）
真琴とめぐみが戻ってくる。
めぐみ「ごめん1人にして。寂しかった？」
真琴は泣き腫らした目をしている。

大津「……あのさ、樹吏のことなんだけど」
真琴、大津をじっと見つめる。
大津「アイツ今、高槻さんの病院に入院してる……」
真琴、目を見開く。
めぐみ「何で黙ってたの！」
大津「樹吏に言うなって言われてたんだよ……」
めぐみ「でも今言ってんじゃん！」
大津「……もし俺が樹吏の立場だったらって考えたら、アイツの気持ちも痛いほど分かるから。けど……高槻さん見てたら、もう俺の中だけでとどめておけなくなった」
めぐみ「大津……」
大津「それからこれ……」
と、高級ブランドの袋を差し出す。
真琴「私に？」
大津、頷く。
袋の中には指輪の箱。
真琴、愛おしそうに箱を抱きしめる。

大津「樹吏からもらったんだけど、高槻さんにあげる。別に高槻さんに渡すなとか言われてないし」
めぐみ「大津、あとで成瀬くんに怒られるんじゃない？」
と、からかう。
大津「いいよ。親友の俺にこんな重役ばっか押し付けた腹いせ」

○大学病院・消化器内科病棟・病室（朝）
成瀬、スマホを見ている。
〈大津：ごめん〉とメッセージ。
成瀬、首を傾げる。
真琴の声「成瀬さん、失礼します」
成瀬「はい」
真琴、カーテンを開ける。
成瀬、呆気に取られるが、
成瀬「……（気づいて）啓太か」
真琴「ねぇ、ちゃんと話そうよ」
成瀬、ベッドから出て、

成瀬「外行こうか」

○同・中庭

真琴、成瀬の後ろを歩く。

成瀬、柵まで行って寄りかかる。

真琴「なんで急にいなくなったりしたの？」

成瀬、ため息をつく。

成瀬「……嫌いになった。俺にはもう時間がないから、無駄に過ごしたくない。これで満足？」

真琴、成瀬をじっと見つめる。

成瀬、視線をそらす。

真琴「いいよ、別れたいなら別れる。でもこれからも会いに来るからね！　会いに来て、他愛もない話して。今までと何も変わらないから！」

と、戻ろうとする。

成瀬、真琴の手を掴む。

成瀬「お願いだからさ……！　俺のせいで真琴に何か我慢させるのも、諦めさせるのも

耐えられないんだよ！」
真琴「樹吏くんのせいで諦めなきゃいけないことなんて何もないよ！」
成瀬「あるじゃん！　捨ててあったの見たんだよ、交換留学の冊子！」
真琴「あれは……別に今じゃなくてもいいと思ったから！」
成瀬「でも俺のせいでそうやって諦めさせた」
真琴「それ以上に、樹吏くんのそばにいたいって思いの方が強いから！　だから見送ったの！　だって私は元々、自分の大切な人たちを病気から助けたくて医者を目指したんだもん」
成瀬「それだけじゃない……真琴といればいるほど、離れるのが辛くなる！　あぁ、真琴の未来に自分はいないんだって思い知って、死ぬのが怖くなる！　叶わない夢見ちゃうから……！」
真琴「私だって離れたくない！　でも未来がどうなるかなんて誰にも分かんないんだか

ら！　今この時を一緒にいたいの！　それだけじゃダメ！？」

真琴、成瀬の手に指輪の箱を握らせる。

真琴「もし本当に樹吏くんの気持ちが変わって、私がいない方がいいなら、それが樹吏くんのためになるなら、そうする。だから樹吏くんの本当の気持ちを聞かせて」

成瀬、箱を見つめて、真っ直ぐ真琴を見る。

成瀬「俺、最後まで諦めるつもりはないよ。治療も頑張る。でも、多分……ていうか絶対。俺、真琴のこと残して先に死ぬからさ」

成瀬、泣くのを堪えて声が震える。

真琴、涙を堪えながら首を横に振る。

成瀬「（懇願するように）だけど……それでも……ほんとは最後までずっと……真琴と一緒にいたい……！」

真琴、泣きながら大きく頷く。

成瀬、指輪の箱を開けて真琴の前に跪く。

真琴の手を握りながら、
成瀬「高槻真琴さん」
真琴「……はい」
成瀬「俺と、結婚してください！」
真琴「はい！」
成瀬、真琴の薬指に指輪をはめる。
成瀬、立ち上がり真琴を抱きしめる。

〇真琴の実家・リビング（夜）
香菜子「もう！　帰ってくる時は教えてよ！
いつも急なんだから」
香菜子と真琴がリビングに入ってくる。
高槻「おぉ、真琴。おかえり」
父・高槻慎也（５３）がソファに座っている。
真琴「お父さんただいま」
×　×　×
真琴、香菜子、高槻がテーブルに座って会話。ピリついた空気が流れる。
香菜子「今なんて？」

真琴「樹吏くんにプロポーズされた。治療が
ひと段落したら改めて挨拶に来るね」
香菜子「ちょっと待って。あなたたち別れた
んじゃなかったの？」
真琴「私の迷惑になると思った樹吏くんが一
度離れただけ。でもちゃんと話し合った」
香菜子「話し合ったって……あなたも何か言
ってよ」
と、高槻に意見を求める。
高槻「彼の具合はどうなんだ？」
真琴「まずは1ヶ月くらい抗がん剤で治療し
て反応を見るみたい」
香菜子「成瀬くんがどういう状況か、真琴が
一番よく分かってるでしょ？　一緒になっ
たとして……」
真琴「余命半年だから結婚しても仕方ない？
じゃあなに、私の結婚相手は健康診断の結
果をお母さんに見せないと許してくれな
い？　結婚した相手が途中で病気になった
らどうするの？　お母さん私に離婚しろっ

て言うの？」
香菜子「揚げ足取るようなこと言わないで！」
高槻「真琴も香菜子も落ち着いて」
香菜子「いつもそう。私ばっかり嫌われ役なのよ」
と、席を立つ。
高槻「真琴の言いたいことも分かる。でも俺だって、母さんと同じことは思ってる。親だからな」
と、香菜子を追いかける。
真琴、ため息をつく。

○大学病院・消化器内科病棟病室
成瀬「（トイレ行こ）」
成瀬、ベッドから立ちあがろうとすると、足に力が入らない。
ベッド柵を掴んでもなかなか立ち上がれず、そのまま床に座り込む。
成瀬「……クソッ」
と、呟く。

ナースコールを押す。
真琴の声「樹吏くん入っていい？」
成瀬「（慌てて）ちょっと待って！　今無理！」
カーテンの下から成瀬の足が見える。
真琴「樹吏くん！？　開けるよ！？」
と、カーテンを開ける。
床に座り込んだ成瀬を見て、
真琴「大丈夫！？　転んだ！？」
成瀬「（嫌そうに）自分で座っただけだから…
…」
成瀬、床に手をついて立ち上がろうと
するが立てない。
真琴「支えるね」
と、成瀬の腕を自分の首にかけて立ち
上がる。
成瀬、ベッドに座る。
真琴「どこも打ってない？　大丈夫？」
成瀬「トイレ行こうとしただけなのに。（自嘲
するように）そのうち俺、ずっとオムツと
か管になんのかな」

真琴「副作用だから仕方ないよ……私車椅子持ってくるね」
成瀬、真琴の手を掴む。
成瀬「……いい。看護師さん呼んだから」
真琴「でも」
成瀬「……真琴にだけは介護されたくない」
真琴「……分かった」
瑠菜の声「成瀬さん入りますね」
と、看護師・宍戸瑠菜（３０）が入ってくる。
瑠菜「どうされましたか？」
成瀬「すいません、トイレ行きたいんですけど足に力入んなくて」
瑠菜「大丈夫ですよ。車椅子持って来ますね」
成瀬「……ごめん、今日はもう帰って……」
真琴、何も気にしていないフリをして、
真琴「……分かった。何かあったらいつでも連絡してね」
と、部屋を出ていく。
×　×　×

成瀬、トイレから戻って来る。
渡部「さっき見舞いに来てた人、兄ちゃんのコレか？」
と、対角線のベッドの患者・渡部克己（６７）がニヤニヤしながら小指を出す。
成瀬「……あぁ、はい」
渡部「くぅぅ、いいねぇ。俺なんか家族もいねーから誰も見舞いなんてこねぇよ」
成瀬「……はぁ」
渡部「まぁ、あと１年の命だからいいけどな」
と、お菓子を取り出す。
成瀬「（俺なんて半年だよ）」
と、睨むように見つめる。
渡部「兄ちゃんこれ食うか？」
成瀬「……いえ、大丈夫です」
渡部「そーかぁ？　うまいのに」
と、食べ始める。
成瀬、カーテンを閉めてベッドに横になり目を閉じる。

○同・産婦人科病棟・休憩室

真琴、ソファにボーっと座る。

町田「お疲れ様でーす」

と、町田が入って来る。

真琴「お疲れ」

町田、真琴の前に座ってアイスを食べ始める。前に成瀬が買ったアイスと同じ種類。

町田「どうしたんすか高槻さん！」

真琴、ボロボロ涙をこぼしている。

真琴「ごめん、なんでもない」

と、涙を拭く。

町田「もしかしてコレ食べたかったとか！？俺今から買ってきますよ！」

真琴「いいいい！　ほんとに違うの」

しかし、拭っても拭っても涙が止まらない。

○同・消化器内科病棟病室

成瀬、ベッドで本を読んでいる。

渡部の声「うっ……」

カーテンレールがちぎれて人が倒れる音。

成瀬「あの。大丈夫ですか？」

と、声をかけるが応答はない。

成瀬、自分のカーテンを開けると、渡部が床に倒れている。

成瀬「大丈夫ですか！？　しっかりしてください！」

成瀬、ヨロヨロしながら駆け寄り、渡部のナースコールを押す。

瑠菜の声「どうされましたか？」

成瀬「３０７号室の成瀬です。倒れてるんです！　（ベッドネームを見て）渡部さんが！」

瑠菜の声「分かりました、すぐ向かいますね！」

成瀬「（渡部に）今看護師さん来ますからね！」

○同・消化器内科病棟病室（夕方）

成瀬、ベッドに横になっている。

×　×　×

（フラッシュ）

渡部「くぅぅ、いいねぇ。俺なんか家族もいねーから見舞いなんて誰もこねぇよ」

×　×　×

成瀬、雑誌を持って転ばないように渡部のベッドの方へ移動。

成瀬「入りますよ」

と、カーテンを開けて中に入り、椅子に座って雑誌を読む。

渡部は眠っている。

×　×　×

渡部「お……兄ちゃん」

と、目を覚ます。

成瀬「大丈夫ですか？」

渡部「俺……どうなったんだ？」

成瀬「急に倒れたんです。驚きました」

渡部「兄ちゃんが見つけてくれたのか？」

成瀬「一応……はい」

渡部「そっかぁ。ありがとな」
渡部、引き出しの中からお菓子の袋を取り出す。
成瀬「看護師さんに怒られますよ？」
渡部「ククッ……黙っててくれよ」
と、袋を開ける。
渡部「うまいぞー」
と、ニヤニヤしながら成瀬に袋の口を向ける。
成瀬「（仕方ないな）」
成瀬、手を伸ばしてお菓子をとる。
渡部「兄ちゃん名前は？」
成瀬「成瀬です」
渡部「（下の名前は？）」
成瀬「……成瀬樹吏です」
渡部「よし樹吏。これでお前も共犯だからな。俺糖尿もあるから本当は食っちゃいけねーんだよ」
成瀬「やられた」
と、笑う。

渡部「なぁ、さっきから何読んでんだ？」
成瀬「ファッション雑誌です」
渡部「今どきの若いもんは洒落てんなぁ」
成瀬「これ、俺が撮ったんですよ」
渡部「まじかすごいな！　ちょっと見せてみろ」
と、盛り上がる２人。

○同・消化器内科病棟病室（朝）
成瀬、点滴の治療中。
ベースンを手に持って、
成瀬「おぇっ……」
と、えづく。
渡部の声「樹吏、今日は点滴の日か？」
成瀬「……はい。もう朝から最悪です」
渡部「キツイよなぁ。あとでなんか買いに行ってやるから。何がいい？」
成瀬「……炭酸飲みたいです」
渡部「よし、任せとけ！」
成瀬、表情が和らぐ。

○同・消化器内科病棟病室

真琴、白衣のまま部屋に入ってくる。

一呼吸おいて、

真琴「樹吏くん入るね」

応答はなし。

真琴、カーテンを開けるとベッドは空。

渡部のベッドから笑い声が聞こえてくる。

真琴、渡部のベッドに近づいてカーテンの外から声をかける。

真琴「樹吏くん？」

成瀬と渡部、２人で青年誌を読んでいる。

渡部、ビクッと反応。「彼女か？」とジェスチャーで成瀬に確認。

成瀬、頷く。

渡部、青年誌を布団の中に隠す。

成瀬「入っていいよ」

真琴「失礼します」

と、カーテンを開ける。

渡部「げ！　先生じゃねーかよ！」
渡部、お菓子も布団の中に隠す。
成瀬「大丈夫ですよ。真琴は産婦人科なので」
渡部「樹吏の彼女、女医さんだったのか！　しかもべっぴんさんだ」
真琴「こんにちは」
成瀬「最近仲良くなった克己さん」
と、真琴に紹介する。
渡部「仲良くしてやってます」
と、歯を見せて笑う。
成瀬「ちょっと！」
真琴「高槻真琴です。ここの産婦人科にいます」
渡部「真琴先生もほら、食いな」
と、お菓子を出す。
真琴、成瀬の方を見る。
成瀬、頷く。
真琴「いただきます」
と、袋からお菓子を取って食べる。
渡部「（ニヤニヤして）よし、これで共犯だな」

真琴「？」
成瀬「克己さん、お菓子とか食べちゃいけないんだって」
渡部「糖尿なんだよ」
真琴「あー！　でも、きっと看護師さんにはゴミでバレてますよ！　ちゃーんと見てますからね」
渡部「だから俺はちゃーーんと、わざわざ廊下のゴミ箱まで捨てに行ってんだよ。誰が捨てたか分かんないようにな」
真琴と成瀬、呆れ笑い。
真琴「今のは聞かなかったことにしますね」
渡部「話が早くて助かるよ真琴先生」
×　×　×
渡部「俺な、清瀬の方の病院に移ることになったんだ。もう薬も効かねぇし、治療はやめてそこでゆっくり余生を過ごそうと思ってな」
成瀬「克己さん……」
真琴「清瀬っていうと、虹ヶ丘病院ですか？」

渡部「そうそうそこだよ。遊びに来てくれよ！」
成瀬「じゃあ俺も早く退院しないと。ちょうど明日の結果次第で退院できるかもしれないんです」
渡部「良くなってるといいな！」
成瀬、真琴の方を見る。
真琴、「大丈夫」と言うように頷く。

○同・廊下
成瀬「真琴！」
と、真琴を呼び止める。
真琴、成瀬の方へ駆け寄る。
真琴「どうしたの？」
成瀬「この間はごめん！　せっかく来てくれたのに、俺あんなこと言って……」
真琴、首を横に振る。
真琴「私の方こそ樹吏くんの気持ち全然分かってなくてごめん。でも思ってることちゃんと伝えてくれて嬉しかった。だから、こ

れからもそうしてほしい」
成瀬「じゃあ、早速いい？」
真琴「うん？」
成瀬「明日の結果説明、真琴にも一緒に聞いて欲しい……」
真琴、花が咲いたように笑う。
真琴「もちろん！」
成瀬「ありがとう」
と、ホッとする。

○同・小部屋（朝）
藤井「検査の結果ですが」
真琴と成瀬、机の下で手を繋ぐ。
藤井「……腫瘍が小さくなっていました」
成瀬「ほんとですか！？」
と、立ち上がる。
藤井、口角をあげて頷く。
成瀬「良かったぁ」
と、大きく息を吐く。
真琴「血液データの方は……？」

水野「大丈夫。問題ない」
真琴、ホッとする。
藤井「今後は通院しながら様子を見ていきましょう」
成瀬「それじゃあ……！」
水野「成瀬さん、退院できますよ！」
成瀬「……っしゃあ！」
と、ガッツポーズ。
水野、真琴と顔を見合わせて微笑む。
藤井「まずはここまで、お疲れ様でした」
成瀬「ありがとうございます！」
真琴「ありがとうございます！」
と、頭を下げる。

○成瀬のマンション・リビング（夜）
真琴と成瀬、ソファに座っている。
成瀬、真琴の手で遊びながら、
成瀬「そうだ。退院できたし、真琴の家に結婚の挨拶行かないと」
真琴「……いいんじゃないかな。私たちもう

大人なんだし、書類出しちゃえば大丈夫だよ」

成瀬「それはダメ。ちゃんと許してもらわないと」

真琴、浮かない顔。

成瀬「俺のこと信じてない？」

と、真琴の瞳を見つめる。

真琴、首を横に振って、

真琴「んーん。信じてる！」

と、成瀬に寄り添う。

成瀬、真琴の頭を撫でる。

○真琴の実家・外

【高槻】の表札。

○同・リビング

テーブルに高槻と真琴と成瀬が座っている。

香菜子、お茶を持って来てテーブルに置く。

成瀬「ありがとうございます」
高槻「(穏やかに) 退院したと聞いたけど、体調は大丈夫なのかい？」
成瀬「波はありますが、生活に支障はありません」
高槻「そうか。良かった」
成瀬「ご心配ありがとうございます。今日は俺のことと、それから俺たち2人のこれからのことでお話があって来ました」
香菜子「私は失礼するので3人でどうぞ」
と、立ち上がる。
高槻「香菜子」
真琴「お母さん！」
成瀬「お母様にも聞いていただきたい話なんです。聞いていただけるまで何度でも来ます」
と、香菜子をまっすぐ見つめる。
香菜子、ため息をつく。
香菜子「……真琴は昔から一生懸命な頑張り屋で、たくさん努力して医者になる夢を叶

えたの。親バカだって笑われるかもしれないけど、どこに出しても恥ずかしくない娘です。きっと今も男社会の中で必死に頑張ってるんだと思う。だからその分、私生活では普通に結婚して、普通に子供を産んで、穏やかに過ごしてほしいと思ってるの。不要な苦労はさせたくないんです」

真琴「樹吏くんと結婚したら苦労するって言いたいの！？」

しかし成瀬が真琴の手を握って制する。

成瀬「小学校まででしたけど、真琴さんのことを見ていたので、俺なりに真琴さんのことは分かっているつもりです。ずっと好きだったんです、真琴さんのこと」

香菜子と高槻、少し驚いた顔。

成瀬「真琴さんは昔からとにかく勉強ができて、責任感があって、思いやりに溢れてて。もっと自慢したっていいのに、絶対にそんなことはしなかったし、どちらかと言うといつも自信がなさそうでした。本当はおし

やべり好きなのに、人見知りのせいで周りと馴染むのに時間がかかるところが可愛いくて、俺はなんとか仲良くなれないかと毎日必死で。悲しいことに、本人には当時全然気づいてもらえてなかったみたいですけど」

と、真琴を見る。

真琴、気まずそうにはにかむ。

成瀬「こうして立派なお医者さんになるまで、きっとたくさんの試練を乗り越えてきたんだろうし、お母さんのおっしゃるように、彼女は今も戦い続けてると思います。ご存知の通り、俺は余命宣告をされました。正直、いつこの命が尽きてもおかしくはありません。だから、こんな俺が真琴さんのそばにいたら彼女の人生の邪魔をしてしまうと思って、一度は彼女から離れました」

真琴、目に涙を浮かべる。

成瀬「でも、やっぱり真琴さんはさすがでした。俺なんかが、俺如きが、真琴さんの人

生に影響を及ぼせると思うなと、叱られました」

高槻「へぇ……」

と、口角を上げて感心する。

香菜子、高槻の膝を叩く。

真琴「ちょっと！　そんな言い方してないよ！？」

と、半泣きで笑う。

成瀬もイタズラっぽく笑う。

真琴「この仕事してたらね、普通とか当たり前がいかに尊いものなのか、嫌というほど実感するの。死は思ってるより突然訪れるものだから、自分の命がいつまで続くかなんて誰にも分からない。だから私は、今この瞬間を後悔なく生きる道を選びたい。私にとってそれは、樹吏くんのそばにいることなの！」

成瀬、床に正座する。

成瀬「僕にとって真琴さんは今も変わらず大好きな人です。真琴さんがいるから頑張れ

るし、彼女のためなら頑張れます。どうか、
真琴さんとこれからの人生を一緒に歩ませ
てください」
成瀬、綺麗に土下座する。
真琴「お願いします」
と、隣で土下座する。
高槻「成瀬くんも真琴も顔を上げて」
しかし成瀬も真琴も頭を下げたまま。
高槻「こんなに娘のことを思ってくれてる人
に、反対なんてできるわけないじゃないか。
なぁ、香菜子」
香菜子「……成瀬くん」
成瀬「（顔を上げて）はい」
香菜子、床に正座して、
香菜子「娘をどうかよろしくお願いします」
と、頭を下げる。
高槻も床に正座して、
高槻「よろしくお願いします」
と、頭を下げる。
成瀬「はい！　ありがとうございます！」

真琴「ありがとうございます！」
真琴と成瀬、手を握り合ってお互いを見て微笑む。
○成瀬のマンション・リビング
インターホンが鳴る。
成瀬「はーい」
成瀬と真琴、玄関へ向かう。
○同・玄関
成瀬と真琴がドアを開けると、パァーンとクラッカーが弾ける音。
2人に向かってクラッカーが弾ける。
めぐみ「退院と結婚おめでとう！」
大津「（ごにょごにょ言って）おめでとう！」
2人の息が全く合っていない。
めぐみ「ちょっと！　ちゃんとシミュレーションしたじゃん！」
と、大津を叩く。
大津「クラッカーやったら満足して何言うか

ド忘れした」
真琴と成瀬、クスクス笑う。
成瀬「ありがとな」
真琴「上がって上がって！」

○同・リビング
めぐみ「わぁ！　オシャレな部屋だね！」
と、部屋を見て回る。
壁には真琴と成瀬の写真や、成瀬が各地で撮った写真がいくつも飾ってある。
大津「これ樹吏が撮った写真？」
と、真琴が写った写真を指差す。
成瀬「そー！」
大津「高槻さん超いい顔してんじゃん」
成瀬「だろ？」
真琴「樹吏くんが1人で映ってる写真は私が撮ったんだよ！」
めぐみ「そうなの？　普通に上手！」
成瀬「俺の教え方が上手いんだろうな」
真琴「えー！　私の腕がいいんだよ！」

めぐみと大津、微笑む。

×　×　×

テーブルに座ってお茶をする四人。

めぐみ「結婚式とかはするの？」

真琴「こぢんまりとやろうかなって話してる」

めぐみ「私ドレスの試着付き合うよ！」

真琴「やったー！　ありがとう！」

成瀬「俺は？」

真琴「樹吏くんには当日の楽しみにしてほしいんだもん」

成瀬「だって当日は撮る暇ないだろうから、事前に真琴の写真撮っときたい！」

大津「いいなぁ！　俺もそんな言い合いしてみてぇーー！」

成瀬「それでさ、実は２人にお願いがあって……」

真琴「これを書いてもらえないでしょうか」

と、婚姻届を差し出す。

めぐみと大津、同時に、

大津「俺でいいの？」

めぐみ「私でいいの？」
真琴と成瀬「もちろん！　２人に書いて欲しい！」
と、ハモる。
真琴と成瀬、笑いながら
真琴と成瀬「ハッピーアイスクリーム！」
と、再びハモる。
大津「うわ、懐かしいそれ！」
めぐみ「息ピッタリじゃーん」
成瀬「２人が同窓会に誘ってくれなかったら、俺たち再会できてなかったから」
真琴「証人欄は絶対２人にお願いしようって話してたの」
大津とめぐみ、感無量の表情。
大津「ご指名とあらば、書かないわけにはいかないな！」
めぐみ「私も、喜んで！」
大津とめぐみ、順番に名前を書く。
真琴と成瀬、嬉しそうに見守る。

○同・キッチン（夜）
真琴と成瀬、並んで食器を洗っている。
成瀬「克己さんにも報告しないとな」
真琴「そうだね！　きっと待ってるよ」
テーブルの上には大津とめぐみの名前が記入された婚姻届。

○緩和ケア病院・外観
【虹ヶ丘病院】と書かれた石板。

○同・受付
事務員が名簿をめくる。
事務員「申し訳ありません、渡部さんという方はいらっしゃいません」
成瀬「そんなはずないんですけど……」
事務員「ですがお名前がないので……」
真琴、不穏な表情。

○同・病棟・談話室
真琴と成瀬と看護師長が座って会話。

成瀬「それはいつ頃の話ですか？」
看護師長「２週間くらい前だったかしら。うちに来てまだ数日しか経ってなかったんですけどね……」
成瀬、言葉を失う。
看護師長「お知り合いだったんですか？」
真琴「……はい。入院してた病院が一緒で……」
看護師長「あぁ！　じゃあきっとお２人のことを言ってたのね」
真琴「？」
看護師長「渡部さんよく話してたんです。血は繋がってないけど息子みたいなヤツがいる。アイツらが結婚するまでは絶対に生きてなきゃいけないんだーって。それはもう楽しそうに話してましたよ」
真琴「そうだったんですね……」
事務員が看護師長を呼びにくる。
事務員「斉藤さんのご家族が……」
看護師長「すぐ行きます」

真琴、立ち上がって、
真琴「お忙しい中ありがとうございました」
看護師長「いえ。今日お２人が来てくださって、渡部さんも空の上で喜んでると思います」
看護師長、部屋を出ていく。
成瀬、座ったまま机の一点を見つめる。
真琴「樹吏くん、帰ろ」
と、肩に手を置く。
成瀬、無言で頷く。

〇駅・ホーム（夕方）
誰も座っていないベンチ。
真琴「樹吏くんあそこ座ろ」
と、成瀬の手を引いていく。
真琴と成瀬、ベンチに座る。
成瀬、膝に肘をつき、手のひらを見つめる。
成瀬「……克己さん、余命１年って言われてたんだよ。俺よりも全然長いはずだったの

に……」

真琴、成瀬の背中をさする。

成瀬、鼻を啜りながら、

成瀬「……あぁ、死にたくねぇ……」

真琴、涙がこぼれないよう空を見上げる。

○成瀬のマンション・リビング

成瀬、リビングで掃除機をかける。

ソファの下で何かを吸い込む音。

掃除機を止めて確認すると、真琴の縁結守が挟まっている。

成瀬、それを見て何かを思いつく。

○同・寝室（夜）

成瀬、ベッドに座っている。

真琴も寝室に入ってくる。

成瀬「真琴！」

真琴「ん？」

成瀬、ベッドの上をトントンとする。

真琴、成瀬の隣に座る。
成瀬「俺のお願い聞いてくれる？」
真琴「ドレスの付き添いの件なら却下だよ！」
成瀬「それはまだ話し合い中じゃん！　でもそのことではない！」
真琴「なんの話？」
成瀬「今日掃除してたらさ、これ見つけた」
と、縁結守を渡す。
真琴「……これどこにあった？」
成瀬「ソファの下に落ちてたよ」
真琴「……そっか。なくしてたのも気づかなかった……ありがとね」
成瀬「お守りってさ、願いが叶ったら返納するじゃん？　だから、出雲大社にお礼参りしに行こうよ」
真琴「……でも、遠出はまだやめといた方がいいんじゃないかな？」
成瀬「俺、神様にお礼したい。真琴とまた会わせてくれてありがとうございますって。ついでに余命も延ばしてもらおっかなぁ

〜」

と、笑う。

真琴の瞳に涙が浮かぶ。

真琴「……（顔を逸らして）全然笑えない」

成瀬、慌てて真琴の涙を拭い、真琴を抱きしめる。

成瀬「ごめんごめん。ふざけすぎた。もう言わない」

真琴「……私も神様にお礼言いたい……でも、カップルで行くと別れるって何かで見た」

成瀬「大丈夫。神様はそんな意地悪じゃないよ。それに俺たちもう夫婦だし」

と、真琴の頭を撫でる。

〇東京駅・改札前（朝）

真琴「樹吏くん何かお弁当買う？」

しかし、隣に成瀬はいない。

後ろを振り向くと、成瀬が胸を押さえて苦しそうにしている。

成瀬「……真琴、ごめん」

真琴、駆け寄って抱き止める。
真琴「樹吏くん！？　ねぇ樹吏くん！？　しっかりして！」
真琴たちの周りに人が集まってくる。
真琴「すみません、そこのスーツの方、駅員さんを呼んで来てください！　お姉さんはＡＥＤをお願いします」
と、的確に指示。
成瀬を寝かせて心臓マッサージをする。
真琴「大丈夫、すぐ救急車来るからね！」

〇大学病院・救急外来待合室
真琴、立ったまま扉をじっと見つめる。
智美「真琴ちゃん！」
智美と晃が走ってくる。
真琴「お義父さん、お義母さん……！」
智美「樹吏は？」
真琴「今中で処置を受けてます……」
扉から医師Ａと水野が出てくる。
真琴「水野くん！」

水野「今日たまたま宿直だったんだ。それで成瀬さんが運ばれたって連絡きて……」
真琴「樹吏くんの容体は！？」
医師Ａ「すぐに救命処置をできたのが良かったです。あと一歩遅ければ目を覚まさなかったかもしれません」
成瀬の両親、ホッとする。
晃「真琴さんのおかげだ。ありがとう」
智美も頷く。
真琴「いえ……」
医師Ａ「ただ、もう、あまり長くないかもしれません」
智美、手で口元を押さえる。
智美「そんな……」
晃「先生！　そんなはずはありません！　最近はご飯も食べて、普通に生活できてたんです！　前の方がよっぽど具合が悪そうだったんです！　何かの間違いですよね！？先生！」
と、医師Ａの肩を掴んで訴える。

水野「成瀬さん、落ち着いてください」
と、間に入る。
智美、泣きながら座り込む。
真琴、智美の隣にしゃがんで肩に手を添える。唇を噛み締めて涙をこらえる。

○同・個室（夕方）
成瀬、酸素マスクをしてベッドに眠る。
モニターの電子音と成瀬の呼吸音だけが聞こえる室内。
真琴、ベッドサイドでじっと成瀬の様子を見守る。
成瀬「……（掠れた声で）ま、こと」
真琴「樹吏くん！　ここどこだか分かる？」
成瀬、ゆっくりと頷く。
成瀬「（掠れた声で）ごめん。俺のせいで……」
真琴「そんなことどうでもいいよ！　樹吏くんが無事ならそれだけでっ……」
成瀬「（掠れた声で）スマ、ホ……」
と、手を伸ばす。

真琴「はい、スマホ」
と、素早く成瀬に渡す。
成瀬、何やら操作すると、真琴のスマホがポケットの中で震える。
真琴がスマホを確認すると、成瀬から動画が送られてきている。
真琴「？」
真琴が動画を再生すると、【真琴へ】とビデオレターが始まる。
真琴、すぐに動画を停止。成瀬を見て首を横に振る。
しかし成瀬は、大丈夫と言うように頷いて真琴の手を握る。
真琴、再び動画を再生。
【一応言っとくけど、これは遺書ではありません。遺書にするつもりもない。だから安心して最後まで見てくださいい】というメッセージに続いて、数々の写真と文字が流れる。以降、その様子。

【第一印象は？　大人しそう、頭が良さそう】

【付き合ったきっかけは？　アイス奢って、キスして、告白して。ちょっと順番前後しました（笑）】

真琴、クスッと笑う。

【２人の思い出は？　小学校のプールにこっそり行ったあの日。真琴までプールに落ちて一緒にびしょ濡れになったこと。あの後俺の実家戻って、母さんに怒られたよね～（笑）】

真琴「そうそう。お義母さんに『何してたの！？』って聞かれて、さすがにキスしてたとは言えなかったよね」

【謝っておきたいことは？　小学校の頃、真琴の話してたクラスの男子に「高槻さん好きな人いるらしいよ」って嘘の情報伝えてました。ごめんなさい（笑）】

真琴「樹吏くんそんなことしてたの？（笑）」

【幸せだな～と感じる瞬間は？　朝目が覚めて一番に真琴の顔を見れる瞬間。実は俺のフォルダには真琴の寝顔が結構入ってる】

真琴「私も樹吏くんの寝顔撮っちゃうからー」

【尊敬しているところは？　心配になるくらい頑張り屋なところ。せめて俺の前では頑張らないでいいよって言いたいけど、きっと頑張っちゃうんだろうね。だから、それ以上に俺が癒してあげられるような、そんな夫になります】

真琴「もう十分、癒してもらってるよ」

と、真琴の目に涙が浮かぶ。

【どんな夫婦になりたい？　おじいちゃんおばあちゃんになっても、２人で手繋いで散歩するラブラブな夫婦でいられたらいいな。たくさん泣かせちゃった分、真琴にはいつまでも笑顔でいてほしい】

最後に【俺と出会ってくれてありがとう。もし生まれ変わっても、俺はまた真琴に恋したい】というメッセージが流れるが、最後だけ写真がない。

真琴、堪えきれず号泣。

成瀬「……最後のとこ……出雲で撮った写真入れようと思ってたんだけど……」

真琴、涙が止まらない。

真琴「……また計画立てようよ。結婚式の写真でもいいよね。試着もついてきていいよ。やっぱり樹吏くんにもドレス、一緒に選んで欲しいな……」

成瀬「……やった……楽しみ」

成瀬、優しい表情で真琴の顔に手を当てる。

真琴、真っ赤に泣き腫らした目で精一杯笑う。

頬に添えられた成瀬の手に自分の手を重ねてゆっくり目を閉じる。

○成瀬のマンション・リビング

T「3年後」

真琴、部屋の中を慌ただしく行ったり来たりしながら出かける準備をする。

部屋には真琴以外誰もいない。

壁の写真にはウェディングドレスを着た真琴とタキシードを着た成瀬たちの写真が増えている。めぐみや大津、それぞれの両親、大島や藤井、水野も集合して病室で撮影されたもの。

○渋谷・ハチ公前（夕方）

人が縦横無尽に行き交う。

雑踏の中を大きなスーツケースを引いて歩く真琴。

広場の巨大看板には国際医療チームの募集広告。真琴が現地の子供たちと笑顔で映った写真に、【挑戦に限界はない】と書かれている。写真の右下にはJ.Naruseのサイン。

真琴、立ち止まって広告の写真を撮る。
男子高校生「いい写真ですよね」
隣で男子高校生も広告を見上げている。
真琴「（照れ臭そうに）ですね」
男子高校生「これ成瀬樹吏さんって人が撮ったんですけど、元々彼風景がメインで人物はまだまだって話してたのに。こんなの反則ですよ。いい表情引き出してるし、何よりこの女性への愛とかリスペクトが伝わってくるっていうか……（我に返って）すいませんなんか語っちゃって」
真琴、幸せそうに、
真琴「きっと彼女も同じくらい彼のことを信頼して尊敬して、愛おしく思ってるんだと思います。私も彼の写真大好きです」
男子高校生、真琴の笑顔を見て広告の女性が真琴だと気づく。
真琴「じゃあ、私はこれで」
と、スーツケースを引いて歩き出す。
男子高校生「あの！」

真琴、足を止めて振り返る。

男子高校生「行ってらっしゃい！」

真琴「（口角を上げて）行ってきます」

（了）